

ふのである。(菊判三九八頁、東京改造社發行、定價四圓)(以上時野谷)

○四天王寺と美術 内藤藤一郎著

○難波古道の研究 竹山 眞次著

——大阪郷土史叢書——

大阪の地は古來「日本の臺所」としてその生命は經濟都市たるにあると考へられてゐるが、近時その發展の益々目ざましきものと共に、市民の間に大阪自身の文化を所有せんとする欲求の頼みに昂まり來つたのは顯著な事實である。かやうな欲求は祖先以來この地に住し、共にその繁榮の爲に盡し來つた人々の間に共通に存する郷土愛の感情と結びついて市民の關心を自ら歴史的なものの向はしめる。最近魚燈窓五郎氏を盟主とし、その地に住する若き歴史家達の協力になる大阪郷土史叢書なるもの、刊行が計畫されるに至つたのも、一にかゝる趨勢に應ずるものと考へられる。第一輯全十二編の中、既に上梓を見たものは上掲の二冊のみであるが、發表せられた豫定の計畫を見るとその意圖するところ必ずしも體系的

に大阪の歴史の諸生面を舒述しようとするのではなく、寧ろ個々に興味ある問題を捕へて自由なモノグラフを作らんとするもの、如く、夫々の方面に於てよく専門的知識の高さを保ちつゝ、なほ學術論文の態を裝はず、努めて平明に記述して心安易き親しみを以て通讀されんことを期してゐるかに見受けられる。四六版百五十頁内外、梶原緋佐子氏の圖案になる紙表紙の蕭洒たる外装もその目的にふさはしいものであらう。

今簡單に上掲二冊の内容を紹介すれば、前者は四天王寺創建の本旨を物部大連討伐に關聯せしめて説く書紀の記載にもかゝらず、なほ外敵に對する護國の思想に基くものとして、同寺に於ける塔婆の位置を重視し、今日金堂本尊を救世觀音としてゐることの本來の制ではなからうといふことから、それに代るべき四天王像が様式上特に四天王寺様と稱すべき特殊のものであつたことを考證し、更に塔婆内の四方四佛の形式の成立事情を稽へ、轉じて中世以後この寺に對する信仰の變化を説き、聖德太子を以て救世觀音の化現であるとする考へが、やがて

この寺を淨土教の聖域たらしめ、春秋二季の彼岸に於ける日想觀の流行と、扇面寫經の如き淨土教藝術品を遺さしめるに至つた經路を明にしてゐる。

後者は、石山本願寺創立以前に於ける大阪の交通路を明にしようとしたもので、熊野街道に關する考證と高津宮南門大道に關する考證との二部より成り、仁徳天皇の難波高津宮南門大道が聖武天皇の難波京の京中大路となり更に中世熊野街道として踏襲されたことを論じてゐる。而してその根據とするところ文獻や古地圖の記載にあることもとよりであるが更に著者の實地踏査の結果に俣つところ甚だ多く、熊野街道に於ける一里塚の配置状態と里制の問題の如き興味ある新事實に就て教へられる所少くない。(大阪湯川弘文社發行、各冊六十錢)(柴田)

○京都帝國大學 考古圖錄 續編
文學部陳列館

昭和十年五月發行

會て本陳列館考古圖錄正編が世に送られて以來十數年を経過する間、今や圖錄初刊時の二千二百餘點は新收品を増加して總計三千八百點に上つた。本書はこの我國を

初め、支那、歐洲の遺物の新收品の主要なるもの、みも以て圖版六〇に編まれたものである。吾々は近き將來に於て、本書につゞく續々編の出版を待望する。(京都帝國大學文學部、非賣品)

○本山考古室要錄

末永 雅雄編

昭和十年二月發行

故本山松陰翁の集藏にかゝる本山考古室の目録として兼て又同翁の思出草として出版せられた本書は、嘗て出版せられた圖錄と解説を以て後半がなされ、前半は藏品の目録に用ひられて居り、各頁上段の空白を同頁の中の目録品名中目立つた遺物の圖示に費され、それはこの種の目録として最初の試である。本書の特徴は即ちこゝに存してゐる。

我々はこの書の如き親切な目録の出版の多く世に出づる事を願ふものである。(本山家藏版、非賣品)(以上中村)

○人文地理學通論

石橋 五郎 閱
別技 篤彦 著

一般に通論的著作は多年學問の研究に従事した老大家